

# GROWING AMBITION

FOR HIGHER EDUCATION.

学生よ野望を抱け  
希望ある未来を描く  
大学教育ビジョン

# 創造性を育てる 大学教育へ

未知を探究し、新たな価値を創り出す創造性を育むことは、教育の大きな目標のひとつだ。人は未知の探究を通じて歴史を変える様々な発見をし、文化や時代を築いてきた。

偉大な先人の発見を礎とし、人類の叡智を生かすために、知識を学ぶのは大切だ。解き明かされた知識を生かすことで、人は初めて新しいことを考えられるのだから。しかしこれからの教育は、これまでに蓄積された知識を生かし、答えのない未知への探究方法を学ぶことも大切であると、多くの教育者が発信している。問題は、具体的にそのような探究ができる場をどのようにつくるかだ。

世界的に見ると、日本の学生の基礎学力は高い。知識の習得という面では、日本は一定の成功を収めてきたと言えるだろう。けれども教育が答えの確認だけにとどまれば、学生はそこから未知への向き合い方や試行錯誤のプロセスを学ぶのが難しくなる。

日本の学生たちは、未来を自分で創る自信を失っているという。これまでの日本の教育は、基礎学力を育成することに成功した一方で、未知の発見から答えを導くことへの自信を失わせる原因を、どこかでつくっているのかもしれない。

未知を観察する方法や、新たな答えに出合う発想パターン、あるいは自分の可能性を信じる力や、自分が社会とつながる実感は、学ぶことができるものだと私たちは信じて、この提言を記している。だが実はこうした本質的な学びは、学校教育の外での経験によって得られているのではないかと考えてしまうのだ。だとすれば学校外で偶然にもそれを身につけた人とそうでない人の間に、社会の中で大きな格差が生じているのではないか。この格差をなくし、未来を創る学生を育むために大学教育の役割は重要だ。

# 野望を抱く学生が育まれる場とは

未知を探究する勇気や創造性を養うカリキュラムを取り入れるには、どうすればいいだろう。大学教育には本来、未知を発見する観察と、新たな答えを発想する試行錯誤のプロセスが必要だ。学生が自分で観察し、自分で問題や課題、または、自分の関心事を発見すること。その関心から自分でテーマを立て、自分で決定すること。あるいは学生が様々な社会経験を、多様な人々や学びと出会う経験を、大学はアシストできるはずだ。こうした自身の創造性の発揮を積み重ねて、学生は初めて「自分が社会を変えられる実感」を得るのだろう。現在の大学教育に、学生自身の好奇心と観察による発見、そして遊び心を加えれば、創造的な学生はきっと育つ。

そんな創造的カリキュラムを提供できるなら、学生たちは荒唐無稽な未来を語り、実現に向けて動き始めるのではないだろうか。大志と呼ばれるそんな意志を、私たちはここであえて「野望」と呼びたい。そして、自分の中で芽生えた野望は、自分自身だけでなく、家族や友人など周りの人々、さらにその先の地域や国、そして世界につながることで変革を起こし、自分自身も含め世界のWell-beingにつながるはずだ。

社会の変化はますます激しくなっている。変化を阻止する同調圧力を乗り越えて、勇気を持って自身の大きな志を宣言できる、野望とも言える強い心の火を灯した学生を育む場を目指そう。

まずは大学を、希望に満ちた野望を胸を張って言える場にしよう。その野望を他の学生や教員が応援し、育むことができる場にしよう。その最初の一步を踏み出せる場にしよう。そして失敗を笑われない、積極的に失敗に向き合える場にしよう。そんな経験から学生が自己成長する場にしていこう。

野望を養う場になるヒントを、この提言に記しておきたい。この提言が、創造の場としての大学を考えるきっかけになることを願う。

# 野望とは



自分や社会の未来をつくる  
大志に満ちた夢を持つこと。

今を前提としない  
大きな未来にもひるまず  
挑戦する気持ち。

自分だけでなく  
社会の未来を共に創造し、  
未来に自分自身が歩む道を  
デザインする意志を持つこと。

# 4つの提言

1

挑戦と観察を  
繰り返して  
創造性を育む学び場へ

3

社会と学生自身が  
つながる経験を  
提供する場へ

2

学生が自身で  
決定し評価する経験が  
できる場へ

4

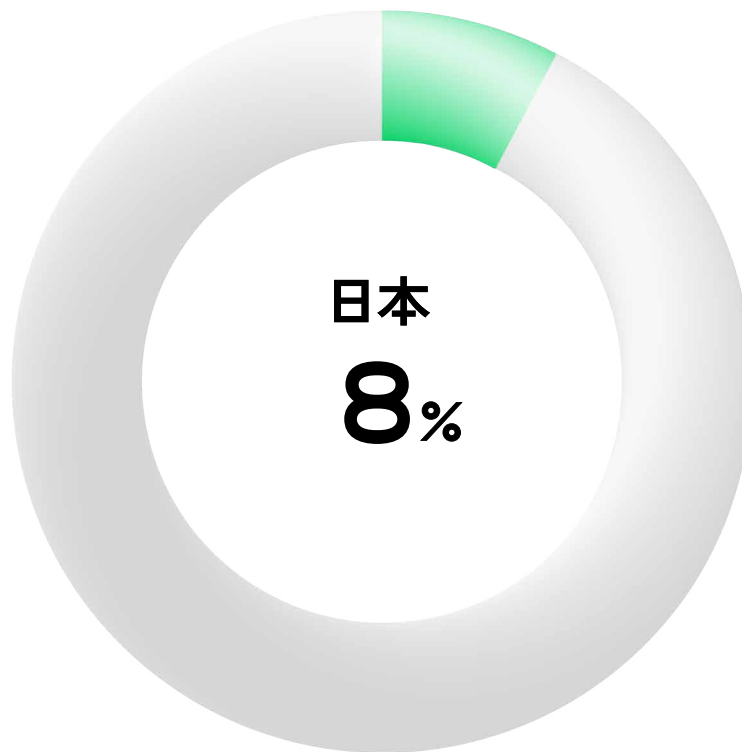
未来を学生自身が  
変える目標と  
実感を育む場へ



# 挑戦と観察を 繰り返して 創造性を育む 学び場へ

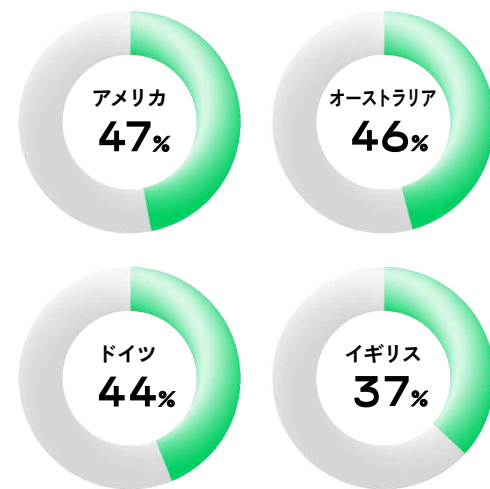
創造性とは未知の問いを見つけ、そこに仮説を立て、それを立証し、実現する力だ。有形無形によらず、あらゆるものや仕組みは、人の創造性から生み出されてきた。だからこそ学生の創造性を育むことは、教育本来の最も大切な達成目標の一つのはずだ。しかし創造性は属人的な才能だとみなされていて、コンプレックスと結びつきやすい。例えば2017年のデータでは、自分のことを創造的だと思う学生は、日本ではわずか8%しかいなかったという結果がある。日本には謙遜する文化があるとはいえ、それでも世界平均の44%程度と比べてみると、この数字はかなり低いと言わざるを得ない。

しかし創造性を育む学習方法は本当にはないのだろうか。それを具体的に身につけられる体系がきっとあるはずだ。この章では、そのヒントをまとめておきたい。



● 自分のことを「創造的」と思う学生の割合

12歳から18歳までの日本のZ世代は自分たちを「創造的」とは捉えておらず、自らを「創造的」と回答した学生はわずか8%でした。



「Gen Z in the Classroom: Creating the Future(教室でのZ世代:未来を作る)」(アドビ株式会社 2017年)の表を元に作成

1-1

## 偶然の変化へと自分を開く

### 答えのない問いを探究する姿勢へ

試験では答えのある問題が出されるが、社会で出合うのは答えのない問いばかりだ。多くの社会人は、まず未知の状況に向き合い、答えへの手がかりを探し、納得できる解にたどり着く道筋を経験する。こうした答えのない問いを発見・探究するには知識が必要だし、教科書の中には確かに大切な知識が詰まっている。

しかし知識獲得の前にまず、学生の中に「なぜ学ぶのか」という目的がなければ、知識は自身の興味を探究するためのものではなく、試験で高い点数を取るためだけのものになるだろう。つまり大学の一般教養課程での教員の大切な役割は、答えを与えることではなく、問いを発見する下地をつくることだ。その観点で言えば、大学の一般教養課程の場こそ、学生が問いを発見し、探究する姿勢を身につける絶好のタイミングではないか。

## 偶然と失敗への挑戦から 気づく時間を

挑戦には当然のように失敗がつきまとう。もっと言えば、発見の多くは失敗から生まれる。ノーベル賞を受賞した科学者の多くが、失敗から発見を導いている。しかし学校では、多くの生徒、学生がとかく失敗を避けようと思ひ込みがちだ。すると生徒、学生は、失敗を怖がって挑戦しなくなるだろう。これでは創造性は育たない。

まずは失敗しても笑われたり怒られたりしない、心理的に安全な環境をつくり、そうした前提を教員は生徒、学生に宣言しよう。心理的安全性が保障された環境でこそ、大きなチャレンジができる。実はやったことのないことや、一見するとバカげていると思われるようなことへの新しい挑戦こそが最善の処方箋となる可能性がある。挑戦をノイズや失敗だとみなす偏見がもたらすこの誤解こそが新たな価値の芽を摘んでしまう。偶然をむしろ積極的に経験すること、その経験から新しいことに気づく総量を増やすことこそが本来の学びなのだ。

問いが本質的なものならば、その答えは一つとは限らない。次なる問いへの道筋もまた一つとは限らない。結果と過程の多様性を感じることで、未来を創り、そして生き抜くための確かな力を育む。正解に導くルールを敷くのではなく、挑戦と失敗から自分にとっての正解を掴む経験を学ぶ。そんなカリキュラムを、ぜひ大学生活の序盤から取り入れたい。

## 偶然の発想で自分の殻を破る学び

答えのない問いを探究すれば、何が正解かわからないのは、当たり前のことだ。観点によって「正しさ」は違ってくる。絶対の正解がない未知の問いに答えを出すには、納得に至るまでの多くの試行が必要となる。ここではエラーや失敗、あるいはチャレンジの経験は、創造性を育む基盤となる。未知に出合う瞬間にこそ創造性が発揮され、育まれていく。これまでの日本の教育は、この大切なエラーを排除してきたのではないか。ではどうすれば、未知に出合い、偶然性を許容し、逆にエラーを活用する学びの場につくり変えていけるだろう。

実は人々が何かの変化に挑戦するとき、あるいは偶然のエラーが起るとき、そこに典型的なパターンが現れることがある。逆にパターンを知っておくことは、偶発的な発想を促すのに役に立つ。

超～な  $x$   
変量

～型の  $x$   
擬態

～のない  $x$   
消失

～が増えた  $x$   
増殖

～にある  $x$   
移動

～を～と  
替えた  $x$   
交換

～を分けた  $x$   
分離

～が逆の  $x$   
逆転

～+  $x$   
融合

提言座長 太刀川英輔の著書『進化思考』における9種類の発想方法「変異のパターン」を元に作成



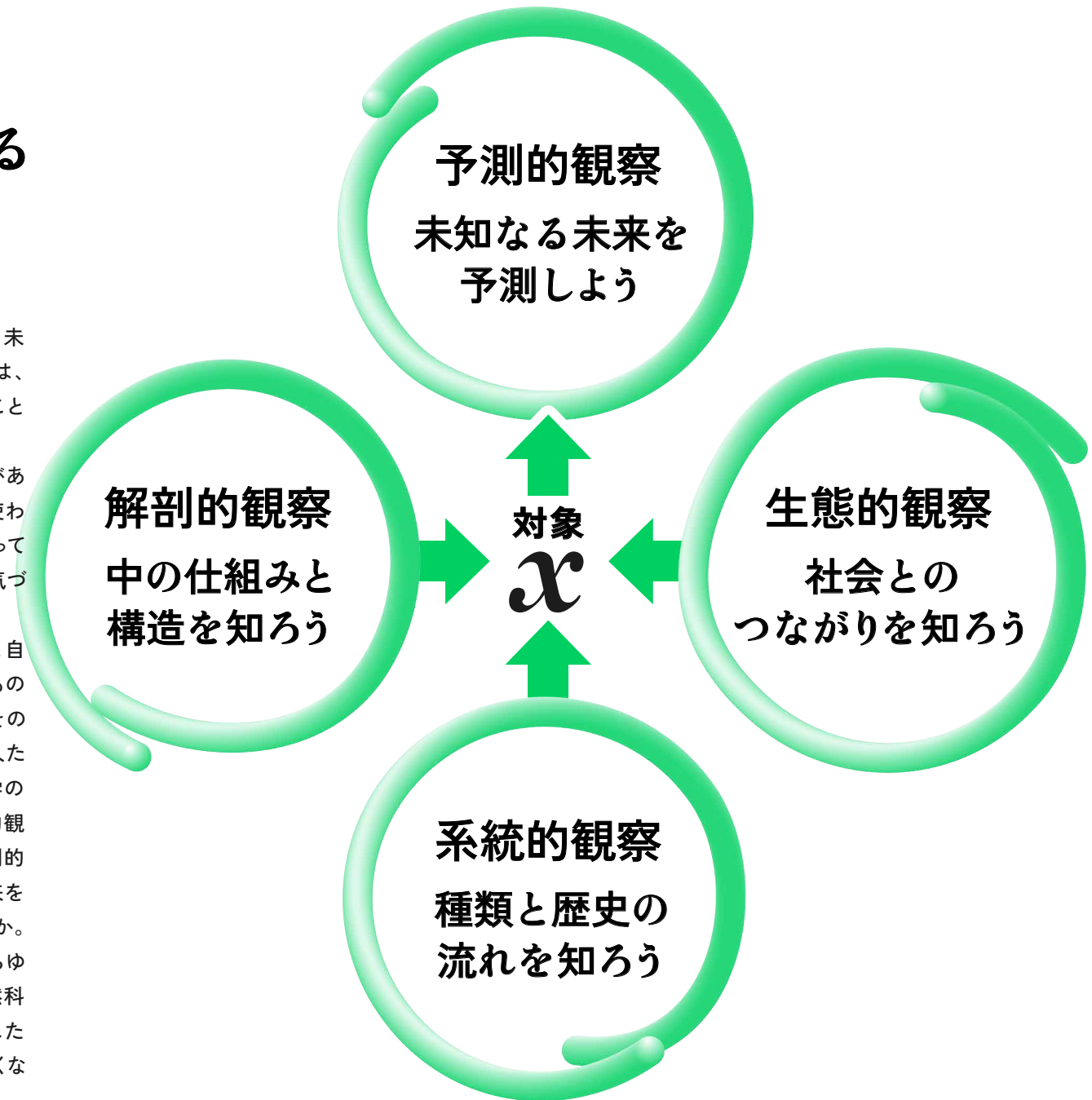
# 観察から適応性を身につける

## 自然科学の観察方法から 観察力を学ぶ

創造性を育むための学びは、学生にとって未知へ向かうプロセスだ。未知の探究では、自分の思い込みこそが壁となる。思い込みを超えるには、自分の外にあるものを客観的に理解すること。つまり「観察」を学ぶことが大切だ。では、観察とは一体なんなのか。

まず観察の方法を調べると、社会には専門性ごとに様々な観察法があることに気づく。そして、よく似た観察方法が分野ごとに別の名前で使われていることに気がつくだろう。さらにこうした観察方法の歴史をたどってみると、その起源は医学や生物学から派生したことが多いことにも気づく。つまり多くの観察は、その起源が「自然科学」のなかにある。

自然科学の歴史は古く、人類は自然の観察を何千年も続けてきた。自分の身体と自分たち人間を囲む自然こそは、人類が最も知りたかったものだからだろう。その連綿とした歴史のなかで、いくつかの観察方法はそのまま学問として体系化された。私たちはこうした偉大な自然科学の先人たちから、観察の方法を学ぶことができる。ここでは、代表的な自然科学の観察方法について「解剖的観察」「生態的観察」「系統的観察」「予測的観察」の4種類として整理したい。人は「未知」を観察するとき、その空間的關係と時間的關係を観察するしかない。つまり内部と外部、過去と未来を観察するしかないと考え、この4つの観察が基盤となるのではないか。こうした先人の素晴らしい観察方法は、自然科学のみならず、実はあらゆる探究に使うことができる。こうした4つの観察方法は、それぞれが自然科学の歴史の中で体系化されてきた偉大な先人の知恵だ。学生がこうした観察方法を身につけて社会を見つめれば、状況の必然性を掴みやすくなり、社会へと適応する力を高められるだろう。



提言座長 太刀川英輔の著書『進化思考』における  
4種類の観察方法「時空観学習」を元に作成

## 試しに創造してみる経験を 提供する場

### 新しい仮説に至るための 思考の反復練習

観察する。仮説を立てる。失敗を恐れず挑戦する。その結果から原因を観察する。うまくいったこと、うまくいかなかったことについて、その理由を観察する。こうした偶然のエラーへの挑戦と、状況の必然性の観察が創造的学習の基本だ。そのプロセスを往復すれば、学生の発想は自ずと磨かれていく。

一つの問題は、小中高大を通して、こうした偶然性と必然性の往復を自由に思考する時間が少ないことかもしれない。カリキュラムの進捗を追求するあまり、未知を探究したり、失敗したり、自分の意見を示したり、苦手なところをやり直したりする時間がないのだ。

だが思考はアウトプットすることで初めて自分のものとなる。自分自身の答えにたどり着くためには失敗と観察を往復する時間を取り、仮説を立てる学びこそが大切だ。改めてエラーと観察を繰り返す反復の重要性を伝え、学生が自分なりの仮説を導く時間を提供しよう。

## 観察から理由を発見する 学びを提供する

ものを観察すると、次に見えてくるのはその背景にある理由や目的だ。世の中のほとんどのものには、何らかの理由が背景にある。この理由は手段よりも大切だ。なぜなら手段は理由のためにあるのだから。けれども手段は教えやすく、理由は観察しにくい。理由は仮説的になったり哲学的になったりしやすいからだ。そのため理由を探究する学びは一元的な答えが決まるものではない。そのため学校では理由を探究するカリキュラムは少なかった。しかしだからこそ、そんな学びに挑戦する必要があるだろう。

まずは観察の方法を教え、観察の結果から理由を推測させる学びを提供しよう。ここで観察する対象は、自然物でも人工物でも、教科科目でも、学生が興味のあるものならば何でもよい。観察自体の経験が、未知を発見し、理由を仮説立てする学びへとつながる。



## 実際につくることで 創造をアウトプットする練習を

創造的思考の反復練習を繰り返すには、まずは生まれてきた仮説を、アウトプットする練習が大切になる。この場合のアウトプットとは、例えば客観的な文章を書くことや、プロトタイプの模型をつくること、CG(コンピュータグラフィックス)パースに描くことなど、あらゆる表現手法があり得る。つまりものをつくることは、一般的に創造性を頭や身体からアウトプットする練習でもあるのだ。十分にアウトプットできると、その仮説を改めて自分の思考から切り離して観察できる。つまり自分の思い込みにとられずに自分の外側のものとして観察するためにも、プロトタイプを可視化してみることはとても重要だ。

# 学生が 自身で決定し 評価する経験が できる場へ

自分のことをよく理解していると自信を持って言える人は、多くはないだろう。あえて自分自身を観察する時間を取ることはなかなかない。しかし学生時代に自分自身のあり方と重なるテーマを選べた人は、その後、社会で活躍する可能性が高い。こうした自己と学びの接続は、学内外のどこで発生するかはわからない。しかし大学が学生の人生を考え、テーマと出合う場となる機会を目指すことはできるはずだ。この章では、学生が自己認識と自己決定を促す場となるためのヒントをまとめておきたい。

## 2

2-1

## 自分を改めて 知るための学び

### 高校までの学びと接続し 自分らしい学び方を身につける

学生は学外・学内問わず、高校生までに、様々な探究を経験してきているはずだ。そして大学では、より自分自身の興味に近い、探究的な未知への学びの機会が増えるだろう。しかし受験を終えて入学したばかりの大学生は、時期的に「入試のための勉強」というマインドから抜けきれていないかもしれない。だからこそ大学入学からの序盤では、学び方のマインドセットを「試験」から「探究」へと切り替えるプロセスが重要になる。学生の中には自分のテーマをまだ決めきれていない人も多いはずだ。それを発見する助走期間として、自己理解からマイテーマの設定が大切になる。大学は、学生自身による自律的な学びのプロデュースを促し、自分で学びを求め姿勢を養うカリキュラムが必要になるだろう。

## 事例

### 武蔵野大学アントレプレナーシップ学部 2年生対象科目「キャリアデザイン3」(伊藤羊一先生)

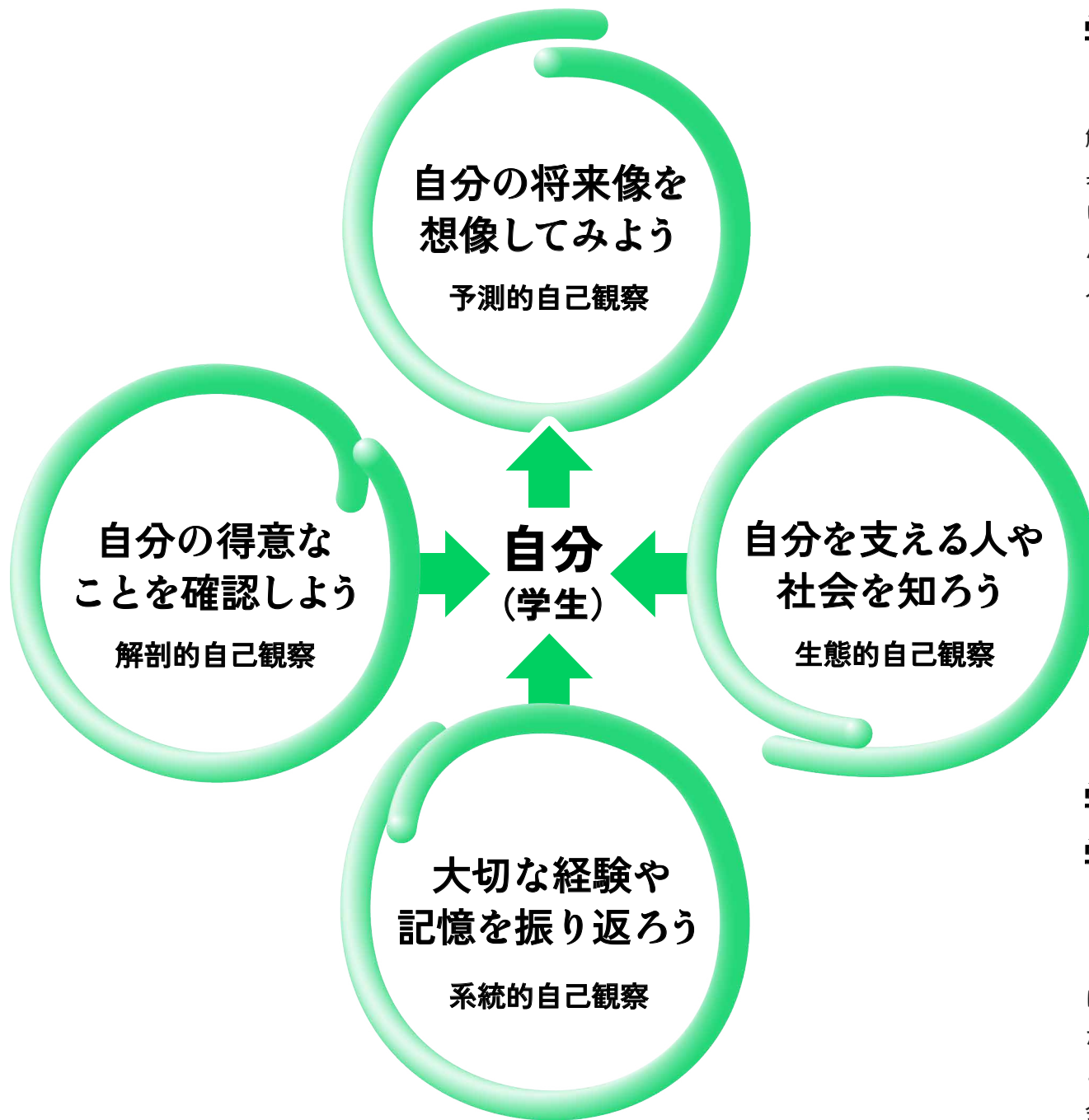
他者や自分自身と対話して、自己理解と自己変革を促すカリキュラム。

- アントレプレナーシップの基本となる「Lead the Self(自分を導く)」を磨く。
- 「Lead the Self(自分を導く)」を「自己の変革」の視点でさらに深めていく。
- 自分と社会とのかかわり方を内省と対話を通じて考える。
- 未来へ想いを馳せ、2年次4学期の必修科目「未来構想」へとつなげていく。

※1年次には必修科目「キャリアデザイン1・2」を履修。リーダーシップの本質である「Lead the Self(自分を導く)」を学ぶ。本授業の後、未来へ想いを馳せ、2年次4学期の必修科目「未来構想」へとつなげる。

週	テーマ	主な内容
1	過去と向き合う	「ライフラインチャート」をグループで対話しながら作成
2	Day1からの気づき	「ライフラインチャート」の作成を通じて気づいたことをグループで出し合う
3	価値観を掘り下げる	「価値観ババ抜き」を行い、自分の譲れない想いを見つめる
4	日々の振り返り習慣1	1行日記を書き、気づいたことをグループで話し合う
5	日々の振り返り習慣2	1週間書いてきた1行日記を振り返り、気づいたことをグループで出し合う
6	変わらない自分と変わりたい自分1	「免疫マップ」をグループで対話しながら作成
7	変わらない自分と変わりたい自分2	「免疫マップ」の作成を通じて考えたことをグループで出し合う
8	人間関係とどう向き合うか	自分にとって合う人・合わない人を掘り下げ、他者とのつき合い方を考える
9	読書会『明日、死ぬかもよ?』	『明日、死ぬかもよ?』を読み、意見交換を通じて、自分のあり方を考える
10	読書会『君たちはどう生きるか』	『君たちはどう生きるか』を読み、意見交換を通じて、自分のあり方を考える
11	死と生を考える	9・10週目の読書会を通じて考えたこと、気づいたことをグループで出し合う
12	未来の自分へ	未来の自分に向けたメッセージをまとめる
13	プレゼン「未来に向けて」	メッセージを1人ずつプレゼンテーション
14	君たちはどう生きるか	プレゼンと講義を振り返り、気づいたことをグループで出し合う

※単元計画表(1コマ100分)



## 学生が自分を俯瞰し理解する機会を

自己の理解を促すという難しく聞こえるかもしれないが、実は自己理解も観察力の向上と機会の提供によって促せると私たちは考える。学生自身が、自分は何に興味があり、これまで何に助けられ、どんな影響を受け、将来をどうしたいのか。自分は今、何を、なぜ、学ぼうとしているか。そんな自身を取り巻く関係性を俯瞰して捉える練習を、カリキュラムに取り入れるといいだろう。学生が大学での探究を自分事として夢中になって取り組むために、学びの下地となる自己理解の時間をつくろう。

## 学生がマイテーマを掲げ 学習を自分事にするには

テーマ型の学習は、まだ答えが決まっていないところが「未知」の学びとして素晴らしい。しかし学生がテーマ型学習を自分の人生につなげるには、テーマと自分の人生との重なりが実感できることが必須だろう。そのため、まずは自己理解のプロセスから、自分取り組みたいテーマを掲げよう。自身を探究した結果、情熱を持って取り組める「ライフテーマ」と出会えるように、大学は学生と社会の多様な接点をつくろう。

2-2

## 履修や方針を 自己決定する学び

### 履修の目的を学生が宣言し 自己決定する経験を

学びを自分事にするには、履修した授業は強制されたものではなく、学生が自分で決めたのだと実感してもらう必要がある。このプロセスのために、学生自身になぜこの授業を履修するのか、それがどう自分の未来や周りの幸せにつながるかを考えてもらい、最初の授業で宣言してもらおう。

逆に教員は最初に「なぜこの学問を学ぶとよいのか」「この学問は社会とどう関連しているのか」など、学生が学ぶ意義を伝えることから授業を始めよう。そうすれば学生にとっては「自分の探究するテーマ」に授業を紐づけ、学びを構築するきっかけが生まれる。学生が自分と学問を関係づけるところから授業を始めれば、自分事として授業に向かいやすくなるだろう。

## 事例

### 国際基督教大学

#### 学生が自由な意思で決められるメジャー選択

入学前に学びたかった分野が入学後に変わることはよくある。高校までは自分を文系だと思っていた学生が理系の専攻に興味を持つこともあるだろう。学生一人ひとりを「個」として尊重するICU(国際基督教大学)では学生が自由な意思で専攻を決められるよう、その選択肢を多様に用意している。

1. 学生が本当に学びたいことを見つけられるように、31もの専修分野(メジャー)を用意。
2. 3学期制を採用し、2年次の終わりまでに計6回の履修の組み換え(授業選択)が可能。学びたい学問へ出合う機会を創出。
3. 専攻の決定を2年次末とし、専門をじっくり見極め、幅広く学ぶための時間を確保。
4. 自分の学びを自分でデザインできるように、専攻を1つ修める方法や、2つを同時に組み合わせる「ダブルメジャー」、2つの専攻を比率を変えて履修する「メジャー、マイナー」など多様な選択方法を用意している。<sup>※1</sup>また、メジャー選択後も、選択したメジャー以外の授業も自由に履修することができる。
5. 入学前、1年次の終わり、2年次の専攻選択時、そして3年次の卒論アドバイザー<sup>※2</sup>申請時と4年次卒業前。大学生生活上重要な節目を迎えるタイミングで学びの「自己評価」や「次年度の展望」「メジャー選択理由」「卒業研究テーマ」「進路選択」などについて、自らの考えをエッセイにまとめる。そのエッセイが自己の考え方の定期点検となり、適切な指導のための不可欠な情報となる。

<sup>※1</sup> どのようにメジャーを選択するかで卒業までに修得すべき単位数の内訳は異なる。

<sup>※2</sup> ICUでは学生をサポートする仕組みの一つとして「アドバイザー制度」を設けている。

入学後から、専任教員(助教以上)がアドバイザーとして学生一人ひとりにつき、1年次から3年次までは、入学時に指定されたアドバイザーが、毎学期の履修計画に助言を行う。そして4年次に卒業研究を開始するにあたっては、それまでのアドバイザーに代わり、卒論アドバイザーが卒業論文作成の専門的な指導を中心に学位取得までの指導にあたる。

## 学生がテーマから逆算して 学ぶ内容を選ぶ経験を

自分の将来をイメージしたとき、未来の自分に必要な知恵はどんな授業から得られるのか。それを学生が自分自身に問いかけながら、履修を決定するプロセスを取り入れよう。授業を通して学生の自己成長やテーマ探究を促すには、どの授業を履修すると目標に対して効果的かアドバイスする、大学や教員のサポート体制が重要になる。自分が固有のテーマを持ち、未来から逆算して、カリキュラムを自分で組み立てる。そんな学びを得ることが、学生の自信につながるだろう。

## 学生が自分の強みを理解して 将来の目標へとつなぐには

学生が未来の自分を多少なりともイメージできていれば、将来役立つ学びは自分で判断できるはず。まずは学生が自分の興味、得意なこと、そして目指す未来像を想像し、実現までの道筋を未来から現在への「バックキャスト」でプロセスを考えるよう促してみよう。将来の自分が社会とつながり、生き生きと未来を歩む姿を思い描けるように導こう。こうして学生個人の興味や夢は、具体性を伴った目標、すなわち野望へとつながっていく。



## 自分の学びを自己評価する

### 学生が自分自身を評価できる仕組みを

学生は中高や受験での経験から、評価とは試験やレポートなどの課題を通して学校や先生に自分の価値を判断されることだと考えているかもしれない。しかし学びのプロセスにおける評価とは、学生を選別するためのものではない。理想的には評価は自分の力を試し、課題を自己発見し、自分の成長につなげる自己確認の手段ではないだろうか。そのためには、学生が誰かによって評価されるのではなく、自分自身で評価できる仕組みがあるとよい。テクノロジーも駆使して自己評価を取り入れ、他者からの評価によって自己肯定感を下げる負のループから、学生たちを守り、自己評価による成長の機会を与えよう。

### 事例

## 東京電機大学 東京千住キャンパス 「人間科学プロジェクト」(広石英記先生)

課題解決型のプロジェクト科目の中で、学生自身が自分の学習目標となるルーブリック(達成度の評価)を作成し、自己評価する。

- PBL(Project-based Learning)はプロジェクトの成功を目標とせず、プロジェクトを通して成長することを目標とし、学習を実現するための手段(学びの場)とする。
- 学習の評価として、プロジェクトルーブリックとともに、学生個々人が身につけたい資質・能力をまとめた学習活動ルーブリックを作成。それをもとに自己評価する。
- 上記のプロセスにより自分自身を客観的に見つめ直す能力を育む機会をデザインしている。

## 学生に教える機会をゆずり 授業を共創するには

まず一歩目として「教員は評価者だ」という前提を疑ってみると、教える立場にも新しい可能性が生まれてくる。例えば学生自身が先生になり、自分自身の言葉で他の学生に教える体験を提供できないだろうか。実は学習の効果は、学生として誰かから教わるよりも、他の人の先生になって教える方がはるかに高いと言われている。教える方法から逆算して、どう学ぶのかを自分で設計する。どんな学びを受けたいかを学生が考え、それを実践する機会を提供するのはどうだろう。

## TIPS

### 学生の授業参加感を高める ちょっとした工夫

学生の質問を中心に授業を組み立てることで、授業に対する期待値の調整と学生の主体的な授業への参加を促す。

また、教員側は授業全体の詳細なデザインが不要となり準備の効率化につながる。

1. 授業の冒頭でGoogleフォームを活用し、授業テーマについて学生が知っていること、興味があることを入力してもらう。
2. 回答を確認し、学生の興味が集まる部分から授業をスタートする。
3. 授業途中で理解度や質問のアンケートをとる。オンライン授業での学生の集中力の低下を防ぐ。
4. 授業の最後に、授業の理解度や自身の学習および意見を記入させる（ミニレポート）。

## 教員が評価しない授業を取り入れる

創造性を発揮するには偶発的な思考と観察的な思考の組み合わせが不可欠だが、両方とも評価が難しい。偶発する学びには一つだけの正解は存在しないし、どれくらい深く観察できたかを点数で評価するのは困難だからだ。

つまり創造的な学びに関しては、教員による評価以外に別の評価方法が要るだろう。いっそ3割くらいの授業では教員による評価を無くしてはどうだろうか。

代わりとして、学生同士に互いの探究をピアレビューさせるのも良い方法だ。意見の交換から個々の更なる探究を促す学びの機会をつくることで学びの共創につながり、自分を客観視するトレーニングにもなるはずだ。また自分自身の学びをリフレクションする機会を定期的に設け、自分の探究を記録として提出させるのもよいだろう。全ての授業を評価する前提を疑おう。

### TIPS

## GOOD & MOTTOの フィードバック

学生へのフィードバックは重要だ。しかし、フィードバックでは改善点ばかりを指摘してしまいがち。すると学生の意欲は上がらず、できないことばかりが記憶されてしまう。そうならないために相手に寄り添うフィードバック方法を紹介する。

1. まずはよくできている点を伝える (Good)。
2. その上で、もっとよくなる方法を伝える (Motto)。
3. よくなるために、いつまでに何をするかを具体的に学生に言葉にしてみよう。

この方法を使い、学生同士で相互にフィードバックすることで、自分自身の理解につながる。



人間は社会的な動物なので、誰かの役に立つ実感を通してこそ、自己肯定感が高められる。社会では立場ごとに異なる観点があり、それら多様な観点を理解することが社会の中では求められる。大学は地域のハブそのものであり、学生にとっては社会との接点になる場だ。学生の大きな野望を育むために、まずは社会の中で小さな成功体験を積み重ねる場を提供しよう。この章では、大学が学生にとって社会との接点となる場になるためのヒントをまとめておきたい。

# 社会と 学生自身が つながる経験を 提供する場へ

3-1

## 社会と自分をつなぐ学び

### 他者になりきる経験から 分断の解決を学ぶ

自分と社会をつなぐには、自分以外の他者の視点で周囲を観察することが肝心だ。ある社会課題に直面している当事者になりきり、課題を当事者として想像する。立場の違いを超えて、それぞれの当事者の目線に立つ。そんな経験は、社会の分断をつなぐことに役立つ。他者の気持ちを理解し、他者の立場で考える練習として「演劇的な」要素を授業に取り入れてみよう。複数の当事者の立場で考えることで、一方からは良いことでも、他方からは悪いことになりうる。そんなジレンマを発見する学びを提供しよう。こうした主体的観察から、視座をあげて双方それぞれにとって納得感のある解決策を見つけ出すスキルは、生きるために大いに役立つ。こうした学びこそ、社会で起こる複雑な問題を解決する練習となるだろう。

## 事例

### 帝京大学

#### 総合基礎科目「質問力を磨く」(松本美奈先生)

※ 上智大学 全学共通科目としても開講

他者視点での問いをつくる授業。他者の観点は学生の社会への関心を高め、視野の広い考え方を促す。

「学びは『問い』から。新聞を教材に、社会を俯瞰し、『問い続ける力』を育む」。

- 新聞記事を読んで疑問に感じたことを質問として言語化し、発表する活動を行う。
- 情報の整理法、発想の広げ方など理論を学ぶとともに、学んだ理論を実践するため、新聞記事を「自分以外の誰かになりきって」読み、質問をつくる。そして、それらの発表・質疑応答を行う。
- 授業はグループワークが中心で、インプット3:アウトプット7の割合で進める。学生が自分にしか書けないことを、誰にでもわかりやすく伝えられることを目指す。

# 大学と地域をつないで 社会体験を授業に

大学はそもそも地域にとって大切なハブとなる場所だ。入学した学生は、大学のある街の住民のようなもの。さらに社会を形つくるステークホルダーとして企業がある。そして大学は、学問と社会をつなぐ扉でもある。だからこそ大学は、学生が地域や企業とかかわり、小さく社会を変える体験を提供しよう。そうすれば学生にも「自分が国や社会を変えられる」という実感を提供できるはずだ。

街や企業とのハブとしての大学、コミュニティとしての大学など、地域を活性化させるエコシステムの一部として、大学を機能させよう。学生の時期に地域と関係すれば、学びや実験に専心できる特異な立場として、学生は社会参加できる。それは心理的に安全な社会とのかかわり方として、絶好の機会となるだろう。地域社会と大学のつながりは、まさに実学そのものだ。その経験から学生は社会や地域を変える主体的な大人へと成長するだろう。

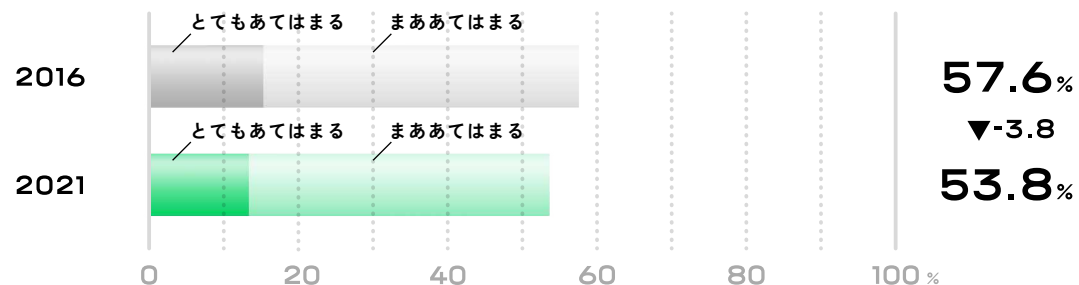
## 事例

### 金沢工業大学 情報フロンティア学部心理科学科 2年生対象「心理学データ解析応用」(石黒千晶先生)

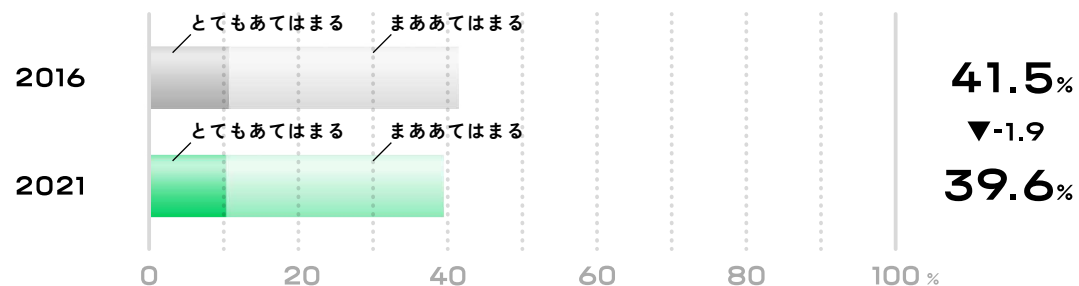
『オープンサイエンス』×『企業連携』×『ジグソー法』でSociety 5.0のデータサイエンスを学ぶ

- マーケティングリサーチ大手企業と連携して、実際にマーケティングで利用するデータを提供してもらう。そのデータを分析し、実地調査をした上で、企業からの課題に対する解決策を提案する。
- 実践活動の中から、心理学の研究で用いられる統計手法と分析ソフトウェアの使用方法を学ぶ。

#### ● 社会の出来事に関心がある



#### ● 日本の政治に関心がある



#### ● グローバルな社会課題に関心がある



※ 選択肢は「とてもあてはまる」「まああてはまる」「どちらとも言えない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の5択

「第4回大学生の学習・生活実態調査」(ベネッセ教育総合研究所、2021年)の表を元に作成

## 自分の憧れへと近づく学び 専門を超えた様々な 大人と出会う経験

多くの人にとって、自分の将来をリアルに感じられるのは、ロールモデルになる大人に出会ったときだろう。つまりどんな人に出会えるか、その出会いを演出できるかが大学の役割となる。高い専門性を発揮している大人や、実際に社会を変えた大人と出会う機会を提供しよう。学生が将来やりたい道の先を走る圧倒的な存在と出会える機会をつくり、学生に自分の将来を未来から逆算させ、今日の前にあるやるべきことを発見させよう。

また学内外を問わず、多様な経験を持つ同世代や年下など、学生時代に出会う人々は、学生の未来に強い影響を与える。大学は世代を超えて多様な挑戦者と出会う機会を設けよう。そうすれば学生は、自分の進む道にも多様な選択肢があることに気づくだろう。

社会とつながり、ロールモデルになる他者と出会うことは、自分自身の未来の探究へとつながっていく。他者との出会いが思考の「枠」を取り払い、新たな思考様式を手に入れることで人は成長する。

### 事例

## 武蔵野大学 アントレプレナーシップ学部

実践重視のカリキュラム、現役実務家教員による伴走、多くの起業家たちや仲間たちとの対話を通じてアントレプレナーシップを育む。

- 教員はベンチャー企業経営者、NPO創業者など実務家が中心。
- 教員と学生は同じ志を持った仲間として接し、そこに上下関係は存在しない。一人ひとりが異なる意志を持つ人間として尊重される場となっている。

## 世界と自分がつながる学び 多様性と出会う機会を活用して、 世界を自分の身近なものに

多様な観点の獲得のためには、日本国内にとどまらず世界を知ることも大切だ。大学は学生の想像できる範囲を、地球規模にまで広げるきっかけを用意しよう。オンラインでもリアルでも、世界と出会う機会を学生時代に経験させよう。大切なのは、多様な人々と出会いたいという意欲を育むことだ。大学は多様性に出会う機会をすでに持っている。例えば大学には留学生がいるが、日本人学生に国を超えた学生間の出会いを提供しているだろうか。その機会を促進する仕組みをつくろう。

学生たちは世界の多様な人々との出会いから、自己成長や自己実現にとどまらない、スケールの大きな目標に出会うかもしれない。大きな目標は必然的に、持続可能性やソーシャルグッドにもつながる。世界の隣人としての実感から、大きな挑戦に挑む野望ある学生を育もう。



# 未来を 学生自身が 変える目標と 実感を育む場へ

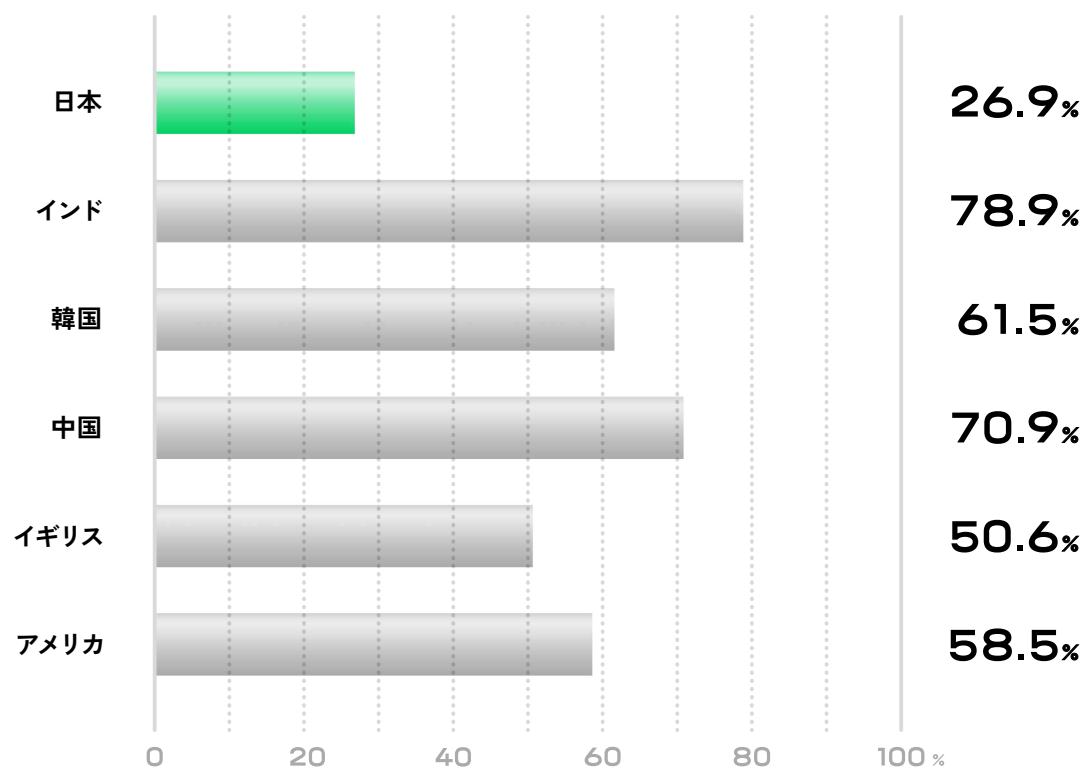


創造性に自信を持ち、自分自身を知り、自分で決め、社会とつながる。こうしたプロセスの先にこそ、得られた専門性によって関係を構築できる実感が生まれ、社会の未来を自分で変えられる可能性に気づく。大きな夢を具体的な目標として自分の言葉で語れるようになる。それが希望ある野望が育まれるプロセスだ。

世界はカオス的な関係の中にあって予測不可能だ。そして目の前の課題のほとんどは、世界中で同じように起きている共通の課題でもある。だからこそ目の前の小さな変化から、社会の大きな変化へとバタフライエフェクト※のように広がることもあり得るのだ。そんな変化の広がりには偶然かもしれないが、目の前の必然性ある仮説にチャレンジした人にだけ訪れる。この章では、学生の学びが大きな夢や目標へとつながる場をつくるためのヒントをまとめておきたい。

※バタフライエフェクトとは  
わずかな条件の差が結果として大きな違いを生むこと。蝶の羽ばたきが遠くの気象状況に変化をもたらすという気象学の用語からきている。

● 自分の行動で国や社会を変えられると思う



「18歳意識調査『第46回—国や社会に対する意識6か国調査—』報告書」(日本財団 2022年)のグラフを元に作成

## 夢を探究し目的とつなぐ学び

### 学生が夢とする職業の 目的を紐解く経験を

将来の夢は何ですか?と問われて職業名を言うことは、子供の頃から誰もが経験するだろう。けれども、ある職業についたから夢がかなったと思うのは大きな間違いだ。その職業の目的と、自分自身の目的が一致したときに、初めて職業は夢を実現するための手段となる。医者という仕事の目的はなんだろう。その仕事はなぜ始まったのだろう。こうした疑問に向き合えば、「医者になりたい」よりも「多くの人の命を救う仕事がしたい」という本来の目的に出合うだろう。向かうべき目的が明確になったときに、夢をかなえる手段は一つでないことに気づくはずだ。

近年では将来の夢を探究する授業が、探究学習の一環として小中高で取り組まれている。こうした授業や、それを推進する学習指導要領には私たちも共感している。では、高校までの探究をうけて、大学は、その具体的な方法として、どうすれば夢や目標の先にある社会とのつながりを探究できるのか。大学はその補助線をどのように引くことができるのだろうか。

そこで学生個々人の「夢」を対象として「夢の職業を進化させる」学習を取り入れてみよう。ある職業が目標となるのではなく、夢や目標をかなえるためにその手段として職業を捉え直すことに加え、常識を逸脱したチャレンジへと学生を促すことができるだろう。

## 事例

### 新渡戸文化学園

### 3Cカリキュラム×旅する学校

「Core Learning(基礎学習)」「Cross Curriculum(教科を横断する学び)」「Challenge Based Learning(社会課題に挑戦する学び)」の3つのカリキュラムを組み合わせ、自律型学習者の育成を目標としている。

自分の好きを探究する過程で必要な知識に生徒が自分で気づき、その知識を得るために教科を学習するという循環が生まれる。

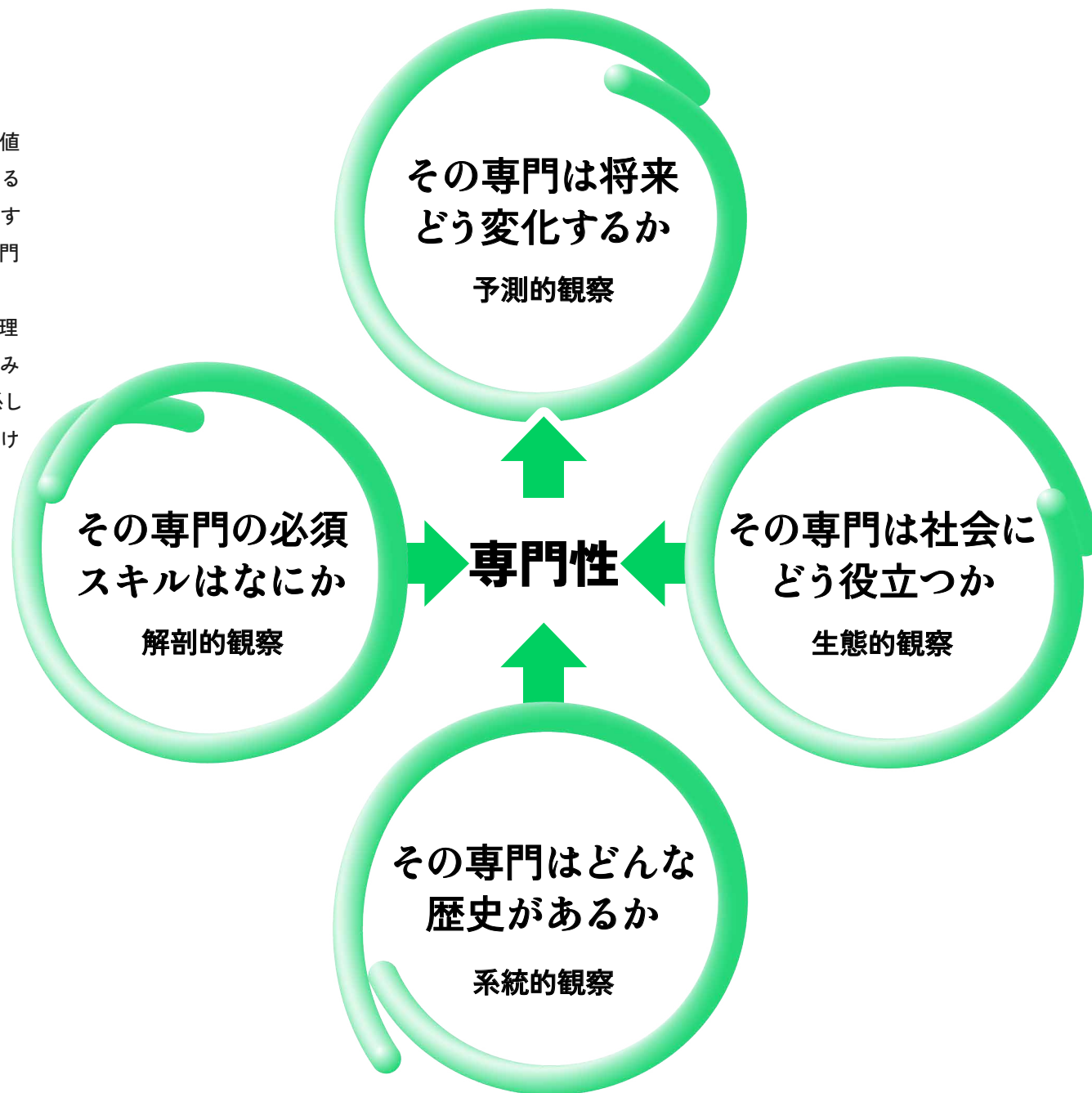
また旅に出て社会課題に実際に出合うことで、自分の人生で大切にしたいテーマが定まり、ますます学ぶ意欲が加速する。

- 学期の冒頭に「エンゲイジメント週間」を設け、各教科の学びが生徒自身の興味・関心と結びついているのかをイメージしてもらう。
- Self-Paced Learningという自己学習の時間を設け、自分の学びをデザインし自己決定する機会を設ける。
- 週に1度、探究学習(クロスカリキュラム)に取り組む日を設ける(毎週水曜日終日)。
- 探究学習で自分が好きなことや興味を発見・探究してもらう、学校内だけでなく学校外にも積極的に出る。
- スタディツアーで日本全国に旅に出て、現地の人の声を聞いて、実際の社会課題やそれを解決する情熱に出合う。
- こうしたプロセスから、「自分の人生の中心に置くテーマ=夢のコア」が見えてきて、教科学習が手段となり、卒業後の進路希望も固まる。

## 目標となる専門性と 社会の関係を観察する

職業の周囲に広がる社会との関係性をよく観察し、その専門性の価値を探究する場をつくろう。そうすれば自ずと自分が身につけようとしている力によって、社会に起こりうる変化にも意識が向くはずだ。まずは目標とする職業を観察によって分析してみよう。分析して得た知識はその先の専門への憧れや魅力につながっていく。

提言1で4つの自然観察の方法をお伝えしたが、この考え方が専門の理解でも役に立つ。これらの観察方法で、改めて学生が専門性を分析してみる時間を設けてみよう。すると、目標とする専門分野がどう社会と関係しているのか、そして何を磨けばその分野で成長できるのかを知るきっかけになるだろう。



提言座長 太刀川英輔の著書『進化思考』における  
4種類の観察方法「時空観学習」を元に作成

# その専門性を揺さぶる 新たな可能性を発想する

探究をしていけば、その世界の枠外である未知のゾーンにもぶつかるだろう。革新的な研究や仕事は、専門性を深く掘り、それを少し横の領域にまで拡張したときに起こりやすい。外と中をつなぐ挑戦が、専門性の新たな歴史へとつながる。

今までの見方ではその先の景色を見ることができない未開を開くことこそ、既存の専門領域の地平を広げる挑戦にもつながる。学生には専門領域に備わる知識を深めさせながら、同時に今までにない専門家のあり方を妄想させてみよう。こうした逸脱を目指すときには、提言1で述べた偶然性から発想する方法が役に立つかもしれない。

偶然に身を任せて様々な失敗へと挑戦をする気持ちと、丁寧に観察から紐解く両方の姿勢を備えた学生は強い。こうした未知への挑戦から、砂金のように輝く価値が導かれることがある。



提言座長 太刀川英輔の著書『進化思考』における9種類の発想方法「変異のパターン」を元に作成

## 自分の目標を具現化できる 野望ある大人へ

自分自身を、そして自分の専門を探究し、専門と社会の関係を探究すると、自分と社会のつながりがはっきり浮かび上がってくる。そうすると、自分の得た専門性によって社会が変わった状態を、徐々にイメージできるようになる。それは地に足をつけながら野望を実現できる大人へと成長する、順調な準備のプロセスだ。人は手元のものしか変えられないけれど、だからといって無力というわけではない。これまで歴史を変えた様々なものは、誰かがその手で生み出したものだ。手元のものを変え、それが広がるのが、大きな変化につながることで、時にはある。学生が手元の力と大きな目標を結びつけ、希望に満ちた野望へとたどり着くプロセスを、大学教育を通して実現しよう。

4-2

## 未来を変える野望を 持つための学び 自分が未来の社会に 与える影響を宣言しよう

自分自身の想いや可能性を、社会の広い関係性に接続し、自分の行動で大きく世界が動くところを想像すること。そして具体的に行動すること。そんな学びの先にあるのがまさに野望を、すなわちBig Pictureを描く学生の姿だ。変化のきっかけは彼らの小さな好奇心から始まるかもしれない。しかし学びながら社会の関係性を知り、必要なスキルに熟達していけば、徐々に学生は自己効力感や学びへのモチベーションをあげていくだろう。授業の途中や最後に、学生に野望を宣言する場を提供しよう。常識からみると荒唐無稽な仮説を、胸を張って言える学生を育もう。

# これからの 大学教育の役割

自分の道の方向に気づき、その専門性の大きな可能性に惚れ込んで、目の前のものを一つひとつ積み上げた先に、未来を変える本物の自信が培われていく。最初から大きな野望なんて持たなくてもいい。けれどもいつか自分が学んだ知識やスキルが、大きな可能性につながることに気づく補助線を、大学はもっと提供できるはずだ。

社会は変わっている。18歳人口が減少し、人生100年時代に向かう中、大学教育はその姿を変えざるを得ない。人生100年時代になれば、学び続けることは必然だ。学びは一生続くものであり、人生そのものとも言えるかもしれない。つまりこれからの大学の役割は、あらゆる世代の自己探究と社会の接点をつくり、自らの可能性に気づく状況を提供することになるだろう。

本提言では大学を「4つの場」として提案したが、それに限らず大学を創造的で自律的な学びの場にするために、学生にどんな学びを提供し、どのような仕組みを構築するかは、多くの可能性があるだろう。

多様な学びの中から、学生がときめき、夢中になれることを自分自身で選択し、目標をかなえるために学ぶ。そのための「学びのプラットフォーム」となるには、入試やカリキュラム、卒業認定のあり方や運用を大きく変えることも必要になるはずだ。当然、それらの自由度を高めるためにテクノロジーの活用は時代の必然だろう。

テクノロジーの活用は、これまで学べなかった人たちにも学びを開くことにつながる。さらに、個々人の学びがデータとして可視化されれば、自ら自律的に学びを創り出す機会が提供できるはずだ。

学びは、年齢や場所や時間から自由であっていい。これからの大学は、学び続けたい人たちの「学びのプラットフォーム」として重要な役割を担っていくだろう。

様々な分野で日本人が世界を前に萎縮し、挑戦する人の足を引っ張り、古い常識や前例に縛られて変化できなくなっているとしたら、これほど残念なことはない。そんな空気がわずかでも日本にあるのなら、教育こそがその暗雲への根本的な解決策となるはずだ。大きな野望を抱き、未知へと挑戦する学生を育む。そんな挑戦者を応援する教育を提供すること。大学はそれを実現できる場に違いない。この提言が、こうした野望を育む教育への変革のヒントになればと願っている。

# GROWING AMBITION

FOR HIGHER EDUCATION.

## 学生よ野望を抱け

希望ある未来を描く大学教育ビジョン

「高等教育の未来を考える会」委員

座長 太刀川英輔 (NOSIGNER代表、JIDA理事長、金沢美術工芸大学客員教授)  
木村健太 (広尾学園中学校・高等学校医進・サイエンスコース 統括長)  
キリーロバ・ナージャ (電通Bチーム クリエーティブ・ディレクター)  
小林一木 (ベネッセ教育総合研究所 教育研究推進室 室長)  
佐藤昌宏 (デジタルハリウッド大学 教授・学長補佐)  
塩瀬隆之 (京都大学総合博物館 准教授)  
林寛平 (信州大学大学院教育学研究科 准教授)  
平岩国泰 (学校法人新渡戸文化学園 理事長)  
松本美奈 (上智大学特任教授、一般社団法人Qラボ代表理事、ジャーナリスト)  
50音順

発行日 2022年10月31日

発行人 谷山和成

編集人 小林一木

発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

執筆協力 太刀川英輔

デザイン NOSIGNER